

岡山県倉敷市立茶屋町小学校における「ふしづくりの教育」

—明楽節夫教諭による第5学年の実践（昭和52年）—

吉 富 功 修

（本学名誉教授）

三 村 真 弓

（本学大学院教育学研究科）

**“Fushizukuri Education” in Chayamachi Elementary School, Kurashiki City, Okayama Prefecture:
Fifth Grade Music Classroom Practice by General Teacher Setsuo Myoraku, 1977**

Katsunobu YOSHITOMI

Mayumi MIMURA

Abstract

“Fushizukuri Education,” the most successful music education approach in Japan, began in 1966 at Furukawa Elementary School in Hida, Gifu Prefecture. Fushizukuri Education was developed by a teachers’ group that did not contain a music teacher. In this respect, Fushizukuri Education is fundamentally different from the music education of Orff, Kodaly, and Jaques-Dalcroze. The characteristics of Fushizukuri Education are as follows: ① The independence of will of the learner is regarded as important, ② Class rules are completely secured, ③ Group activities are seriously considered, ④ Solos and remarks are secured, ⑤ Frequent use of repetition, ⑥ Reduced time for teacher remarks, and ⑦ Singing ability and performance power of the learners are excellent. Fushizukuri Education was adopted in many elementary schools, and was practiced in each place of Japan. In this article, we examine Fushizukuri Education as practiced in the fifth grade of Chayamachi Elementary School in 1997. Additionally, we review how the seven points of this style of education as performed at Furukawa Elementary are maintained or transformed.

はじめに

「ふしづくりの教育」は、岐阜県飛騨地区古川小学校が昭和41・42年に県教委の小学校音楽科の研究指定校になったことから始まった。「ふしづくりの教育」は、当時の、そしてこれまでのいかなる音楽科教育よりも優れた実践であった。昭和53年3月にその「ふしづくりの教育」は終焉を迎えた。その12年間の実践は、わが国の音楽科教育に大きな影響を及ぼした。最盛期の「ふしづくりの教育」を指導した中家一郎校長の手記によると、昭和46年度には大津市・関市・新潟県・千葉県・山形県・富山県から8人の音楽専門の教師が1月～1週間の内地研修に来たし、8月と11月には福井県に、2月には愛知県に講演・講習にいらしている。さらに昭和47年度には、宮崎県・愛知県・福井県・大垣市・「ねむの里」・広島県で講演・講習を行っている。中家一郎校長の最後の年となった昭和49年度の研究会には、1700名もの申し込みがあったという。

「ふしづくりの教育」について語る多くの人の原体験は、実際に古川小学校で体験した驚愕と感動であろう。吉富は、昭和49（1974）年10月28日に、古川小学校の研究会に参加し、その驚愕と感動を多くの場面で体験した。そのなかで、第2学年の《三匹のこぶた》の《家づくりの歌》を紹介したい。もちろんす

べて子どもたちの自作である。

昭和49年度 第2学年 《三びきのこぶた》より 《家づくりの歌》

♩ = 92

ど だ い を つ く り は し ら を た て て か べ を め っ て や ね つ け て と び ら を し っ か り

6

つ ま し ょ う と-ん と-ん と-ん と-ん と-ん と-ん と-ん と-ん と-ん と-ん と-ん と-ん と-ん と-ん

The image shows two staves of musical notation in 4/4 time. The first staff contains the melody for the first line of lyrics, and the second staff contains the melody for the second line. The tempo is marked as quarter note = 92. The key signature has one flat (B-flat).

I 古川小学校における「ふしづくりの教育」

同校の「ふしづくりの教育」は、中音免許所有者のいない教師集団（そのなかで、昭和41年から48年まで同校の音楽主任であった山崎俊宏の存在は特筆されるべきである）と、昭和42年度から49年度まで同校の校長を務めた中谷一郎の努力によって開発され、多くの試行錯誤を重ねながら、より洗練されていた。それは30段階・102ステップというふしづくりの緻密なカリキュラムと学習者の主体性を重視した授業実践に結実している。古川小学校での実践は、同校の研究発表会、日本音楽教育学会や全日音研での発表等によって全国的に注目を集め、「古川詣で」という造語まで生まれた。吉富は古川小学校での昭和49年10月28日の音楽拡大参観日に参加し、その第1学年の授業、体育館でのデモンストレーションと学年毎のオペレッタに、胸が熱くなる感動を覚えた。なお、山本弘の著作（『音楽教育を子どものものにー子どもが音楽するふしづくりへの体質改善』（昭和48年）、『音楽教育の診断と体質改善 音楽能力表とふしづくり一本道』（昭和53年）、『誰にでもできる音楽の授業 ふしづくりの音楽紙上実技講習』（昭和56年）も「ふしづくり」の名を広めることに貢献した。

II 各地への「ふしづくりの教育」の波及

こうした古川小学校での研究発表会には、全国から、小学校教師等が多数来観した。まさに「古川詣で」である。参観者数は以下のように推移している。昭和42年度の県指定研究発表会では「主体性、創造性のある授業研究」で全教員の音楽の授業を公開し、400人が参観した。43年度は県の指定はなかったが中谷一郎校長の主導で自主研究発表を行った。昭和44年度も同様に自主研究発表を行い、357人が参加した。45年度は鍵盤ハーモニカを全国に先がけて採用した。46年度は参観者が1,990人に増え、内地研修者も8人いた。47年度は参観者2,382人、内地研修者5人であった。48年度は、NHKテレビ「教師の時間」で全国放送し、参観者2,002人、内地研修者6人であった。49年度は日本音楽教育学会で発表し、参観者2,898人、内地研修者7人であった。

このような古川小学校の「ふしづくりの教育」を知って、自分の勤務校でも「ふしづくりの教育」を実践しようとする小学校教師が各地に現れた。それらの小学校では教員を古川小学校の研究会に派遣した。さらに、県単位、地区単位で同校の教員を招いて講習会を開催した。さらに、「ふしづくりの教育」を取り入れた音楽の授業を研究する小学校では、古川小学校に講師の派遣を要請し、指導を受けることもあった。

III 岡山県における「ふしづくりの教育」

岡山県においても「ふしづくりの教育」が導入され、展開されていった歴史がある。古川小学校での「ふしづくりの教育」の中心人物であった当時の音楽科主任・山崎俊宏（後に高山教育事務所指導主事、古川小学校教頭）によると、「岡山には6・7回行った。高梁市の大窪先生のところに2・3回、倉敷市立茶屋町小学校に金広保校長（昭和49年4月1日から52年3月31日まで在任）の時

に2回行った。その他にも2回くらい行った記憶がある。」とのことであった。岡山県における「ふしづくりの教育」は、これ以外にも、川上郡成羽町立成羽小学校における大窪道生と結城哲一郎の実践がある。大窪道生は、茶屋町小学校の研究会にも講師として招聘されており、岡山県における「ふしづくりの教育」の第1人者であった可能性がある。さらに、岡山市立豊小学校における神尾一郎の実践もある。神尾一郎の実践については、太田正清（2012）「岡山市立豊小学校における“ふしづくりの音楽教育”に関する研究」『中国学園紀要』第11号，pp.215-225，に紹介されている。加えて、前述の結城哲一郎が中心となった玉野市立八浜小学校における実践もある。これは、昭和57（1982）年11月5日に開催された、『昭和56・57年度 玉野市教育委員会指定研究発表要項 研究主題 豊かな表現力の育成—子ども自ら学ぶ音楽教育を通して—』でその内容を知ることができる。第1学年から第6学年まで同時に実施された音楽科の学習指導案には、第6学年以外にはすべて、例えば第1学年では、題材の項目に「A 歌問答とりレー 2段階」のように、すべてに「ふしづくりの教育」の何段階かが明記されている。さらに、学習活動の項目は、第1学年から第5学年までが、1. すきな歌(既習教科書教材より)，2. 新しい教科書教材の学習，3. ふしづくり，4. 次時の予告，となっており（2と3が入れ替わっている学年もある），古川小学校での「ふしづくりの教育」の授業実践を忠実に反映している。第6学年の題材は、「生活の歌（自作曲）」である。

IV 茶屋町小学校と「ふしづくりの教育」の遭遇

本研究では倉敷市立茶屋町小学校での「ふしづくりの教育」に着目する。倉敷市立茶屋町小学校では、昭和47年度に、創作領域を中心として模倣から独自のものへ発展させる学習に取り組み、同48年3月23日には『ちゃやまちっ子 児童作品集』が出版された。それには、114名の作品の5線楽譜が、氏名入りで掲載されている。すべて、教師による手書き楽譜の印刷である。さらに、同3月24日には、茶小研究紀要『情操に培う学習指導法の研究』が出版された。それには、国語・音楽・図工の3教科が選ばれたこと、主題設定の意義、主題の構造、研究組織、研究計画、研究経過、および教科ごとの研究、が示されている。研究経過のうち音楽に関連するものを示すと、6月14日研究授業・全員参加（音楽・河合），9月20日研究授業・部員参加（音楽・新谷），10月11日研究授業・全員参加（音楽・仙波）小松原富几校長による指導，11月30日研究授業・部員参加（音楽・中田ケ），1月25日研究授業・部員参加（音楽・萩野），2月7日研究授業・全員参加（音楽・太田ヒ），3月24日校内研究発表会，と続いている。音楽科の研究では、1. 研究主題，2. 音楽科と情操との関連，3. 研究の狙い，4. 研究の内容・各学年の実践例，5. 反省および今後への課題・児童の作文・創作指導年間計画，が示されている。4. 研究の内容では、低学年〈創作のささえとなる音楽的感覚を育てる指導法〉，中学年〈創作のささえとなる記譜力を伸ばす指導法〉，高学年〈旋律創作と和音づけの指導法〉ごとに内容と実践例が詳細に示されている。さらに、授業研究例として第3学年の音楽科学習指導案が示されている。これらを検討すると、この時点ではいわゆる「ふしづくりの教育」への傾倒はほとんど見られない。しかし、8名の児童の作文にみられるように、「創作」をとりあげることによって、音楽の授業がすきになった子どもが多いことも明らかにされている。

このように、昭和48年度までは、茶屋町小学校と「ふしづくりの教育」の遭遇はなかったと考えられる。前述した元古川小学校の音楽主任の山崎俊宏の「倉敷市立茶屋町小学校に金広保校長（昭和49年4月1日から52年3月31日まで在任）の時に2回いった」という言葉どおり、昭和49年度から「ふしづくりの教育」の実践が始まったものとする。

しかし、昭和48年度に、当時の茶屋町小学校の中田桂子教諭が、「私が今までしてきた音楽教育は誤りだった。これからは「ふしづくりの音楽教育」をしたい」と同僚を説得したという。これには、おそらく、川上郡成羽町立成羽小学校の音楽主任であった大窪道生教諭が、「ふしづくりの教育」と出会い、山崎俊宏先生を招いて、「ふしづくりの教育」への傾倒を強めていたことと関連があるのではないかと推測する。この中田桂子教諭と大窪道生教諭との出会いが、茶屋町小学校と「ふしづくりの教育」との遭遇へと発展したものと考えられる。このあたりの経緯については、さらに解明したい。

茶屋町小学校では、金広保校長（音楽が専門教科）が昭和49年に着任し、昭和51・52年度の県の小学校

音楽科の研究指定を前提として教員組織を固めていった。そして「ふしづくりの教育」を採用し、着々と準備を進めていった。

V 茶屋町小学校における「ふしづくりの教育」の展開

その後茶屋町小学校では、昭和50年度と同51年度に、岡山県小学校音楽科研究校の指定を受け、「ふしづくりの教育」に沿った授業が実践されていく。

昭和50年度の研究の経緯と成果が『茶小研究紀要 楽しんで音楽する子どもを育てるための指導法(だれにでもできる音楽の指導法)』(昭和51年3月10日出版)に示されている。昭和50年度の「研究経過」の主要なものは、①5月27日：古川小学校視察5名、②5月29日：校内研究会・緑丘小より17名参加、③6月26日：古川小学校視察4名、④7月2日：校内研究会・講師板谷・山本、⑤7月24日：古川小学校音楽研修14名、⑥9月22日：校内研究会・講師板谷・山本、⑦10月17日：中四国音楽研修(山口市)4名、⑧校内研究会・講師板谷・山本、⑨10月28日：川上郡成羽小8名、⑩10月30日：全国音楽大会(仙台)1名、⑪11月13日：音楽研究会(倉敷市立四福小)2名、⑫11月27日：県小教研音楽部会(茶屋町小学校、305名参加)・講師：板谷博光(市教委)、坂口進(吉備小)、大窪道生(上房郡大和小)となっている。さらに、「研究のあゆみ」では、12頁にわたって、1. 低学年におけるふしづくりの指導について、2. 中学年におけるふしづくりの指導について、3. 高学年におけるふしづくりの指導について、が古川小学校に学んで詳細に記されている。学習指導案は、第1学年1、第2学年2、第3学年2、第4学年2、第5学年2、第6学年1、合計10点が示されている。それらはすべて「ふしづくりの教育」に準拠した学習指導案であり、すべてに30段階のどの段階に位置するかが明示されている。最後に、児童の作品が16頁にわたって、氏名付きで収録されている。

昭和51年度の研究の経緯と成果が、『研究集録 昭和51年度 楽しんで音楽する子どもを育てる指導法—力いっぱい表現しようとする子どもをめぐって—』(昭和52年2月28日出版)に示されている。昭和51年度の「研究経過」の主要なものは、①4月20日：音楽研究授業4B、②4月21日：音楽研究授業6C、③4月22日：音楽研究授業2A、④6月3日：校内音楽研修会、⑤6月10日：音楽研究授業2D・3A・5A、⑥6月17日：音楽研究授業2B・4A・6A(井原市より12名参観)、⑦6月23日：校内音楽研修会、⑧6月25日：全職員が古川小学校を視察、⑨7月1日：校内音楽研修会、⑩7月15日：音楽研究授業、⑪9月9日：校内音楽研修会、⑫9月16日：校内音楽研修会、⑬10月13日：音楽研修会、⑭10月20日：要請訪問(音楽研究授業)・1D・2C・3C・5C(倉敷市教委・熊谷輝雄、上房郡大和小・大窪道生)、⑮10月27日：全国音楽研究大会参加・和歌山市1名、⑯11月12日：校内音楽研修会、⑰11月16日：県小教研音楽部会(茶屋町小学校、300名参加)、講師：古川小学校教頭・山崎俊宏、上房郡大和小教頭・大窪道生、倉敷市教委・熊谷輝雄、県教委・高原景介、となっている。「研究のあゆみ」では、各学年の教科書教材曲のカリキュラム案が、歌唱教材と鑑賞教材別に示され、加えて、ふしづくりに関して、合う音づけの初歩指導やリズム伴奏の初歩指導やことばあつめなどのより具体的な成果が示されている。学習指導案は、第1学年3、第2学年4、第3学年4、第4学年3、第5学年4、第6学年3、と合計21点が示されている。前年度よりも大幅に増加している。それらはすべて「ふしづくりの教育」に準拠した学習指導案であり、すべてに段階が明示されている。最後に、児童の作品が14頁にわたって、氏名付きで収録されている。

VI 本研究の対象となる「ふしづくりの教育」の授業

茶屋町小学校では、研究校の指定の終了後も「ふしづくりの教育」が熱心に実践されていた。昭和52年11月15日には、「力いっぱい表現しようとする子どもをめぐって」というテーマのもとに、音楽授業公開を行った。全学年の「ふしづくりの教育」の6授業が一斉に公開されている。第1学年では「《らくだ》・リズム分割」(塚前享子教諭)、第2学年では「《たぬきのたいこ》・二拍子系リズム分割」(中田桂子教諭)、第3学年では「《小ぎつね》・部分変奏」(中島綾子教諭)、第4学年では「《とんび》・三拍子のリレー」(Z教諭)、第5学年では「《冬げしき・短調の節づくり》」(明楽節夫教諭)、第6学年では「《大きな古時計》・

日旋の節づくり」(能登通子教諭)、の全6学年1学級ずつの公開授業が一举に行われた。その後に「創作発表」と「協議会」が行われた。

それぞれの授業の学習活動は以下である。それらには、(第1.2学年では冒頭に遊び)→既習曲を歌う活動→ふしづくり→新しい教科書教材、という古川小学校での「ふしづくりの教育」の特徴が明瞭に現れている。さらに、各授業が「ふしづくりの教育」の30段階のどこに位置付くかが明示されている。それらのうち、明楽節夫教諭による第5学年の授業を分析し、古川小学校で実践された「ふしづくりの教育」の授業と比較することが本発表の目的である。

VII 本授業について

VII - I 本授業の学習指導案

第5学年A組 音楽科学習指導案

昭和52年11月15日(火)

題材：教材 …… 冬げしき
ふしづくり …… 短調のふしづくり (一本道 27段階)

目標と計画：

1. 歌詞の内容を生かして、情景をえがきながら歌うことができる。

○歌おぼえ(1) ○歌いかたのくふう(1)

○二部合唱(2)(4/15回計画)

2. いろいろな調性に関心を持ち、短調で一部形式のふしがつくれ、簡単な合う音づけができる。(14/25回計画)

ねらい：

○ひびきを感じながら、正しい音程で二部合唱できる。(3回目)

○長調のふしをつかって、それを同主短調のふしになおすことができる。(2回目)

学習活動：指導上の留意点

1. 既習曲をうたう：ひびきを感じながら、のびのびと歌わせ、ふんい気づくりをする。

2. 短調のふしづくり

○4人組でつくる

長調→短調：半音下げる音に気をつけさせる。短調のふしのテンポについてもより適切なものになるようくふうさせたい。

○えらぶ：発表までに時間があれば、合う音、合うふしについてもくふうさせる。

○発表：長調のふしがうまく同主短調のふしになっているかなど気をつけてきかせる。

3. 冬げしき

○斉唱する：曲のイメージをえがきながら < > レガートなどに気をつけて歌わせたい。

○二部に分かれてパート練習をする。

：伴奏者に合わせてしっかり練習させる。

○二部合唱をする：全体のバランス、音程などに気をつけて歌わせる。

4. 次時の学習を知る

VII - II 本授業の流れ

以下の凡例

- ・((0.10)は開始からの時間を示す。
- ・C1「」は児童の発言、指揮、伴奏等を示す。
- ・T「」は教師の発言等を示し、メッシュで強調する。
- ・聴き取れなかった発言は○○(短い)、……………(長い)で示す

(0.00) 挨拶 C1「これから音楽の授業を始めます。起立，礼，着席」

VII - II - I 既習曲を歌う

(指揮・伴奏は児童が担当し，曲ごとに交代する)

(0.10) C1「初めに既習曲を歌います。前に出てください。」(全員前に出て，合唱の隊形に集合)

① (0.26) C1「最初は《花のまわりで》です。」(この曲の指揮者 C2 と伴奏者 C3 が位置につく)

C2「楽しく歌ってください。」C 全員「はい」

(0.44) 《花のまわりで》 ピアノ伴奏，二部合唱，1・2・3 番

② (2.19) C1「次は《まっかな秋》です。」(この曲の指揮者 C4 と伴奏者 C5 が位置につく)

C4「速くならないように歌ってください。」C 全員「はい」

(2.27) 《まっかな秋》 ピアノ伴奏，二部合唱，1・2・3 番

③ (4.33) C1「次は《にじの橋》です。」(この曲の指揮者 C6 と伴奏者 C7 が位置につく)

C6「ことばをはっきりさせて歌ってください。」C 全員「はい」

(4.45) 《にじの橋》ピアノ伴奏，二部合唱，1・2 番

④ (5.41) C1「次は《日曜日の歌》です。」(この曲の指揮者 C8 と伴奏者 C9 が位置につく)

C9「愉快に歌ってください。」C 全員「はい」

(5.48) 《日曜日の歌》 電子オルガン伴奏，斉唱，1・2 番

(6.25) C1「席に帰ってください。」(全員着席)

VII - II - II 短調のふしづくり

(6.45) C1「短調のふしづくです。……。」(一本道 27 段階)

- ・ 鍵盤ハーモニカを持って 4 人組で短調のふしづくりを始める。
- ・ 相互に教えあう様子が聞こえる。
- ・ およそ 12 分間のふしづくり。基本となる既存の長調のふしがあり，それを同主短調に変換する。

(18.30) C1 電子オルガンの和音奏で「短調のふしづくり」は終了。

C1「これから発表してもらいます。1 班の人から発表してください。」

(19.00) T「えーっとね。聴くときにどんなふしができたかな，おかしい音はないかな，そういうことをよく注意しながら聴いてください。」

第 1 班 (19.13) C10「私たちは，みつはたさんとわたしと同じようなふしを作って，それからあとの 7 音の間の 4 音は二部合奏にして，あとは全部同じ音にしました。」 やり直し 1 回。



第 2 班 (20.07) C11「僕たちは，合う音と合うふしを付けてみました。」 やり直し 8 回。

(紙幅の関係で楽譜を省略)

第 3 班 (22.12) C12「僕たちは，3 拍子に変えて最後の 7 音だけ合うふしを付けて，2 重奏を創りました。」
「せーの。」



第4班 (22.50) C13 「私たちの班は、3拍子に直して、続く音と終わりに音をちょっと付けてみました。」



第5班 (23.30) いきなり演奏する。



(23.57) C6 「意見はありませんか。一考える間があるー 菊池君」 C14 「5班さんの合う音はとてもきれいでした。」 C6 「高田君」 C15 「4班さんの終わりに付けたふしと続くふしは、リラックスしてとてもよかったです。」 C6 「〇〇さん。」 C16 「4班さんの最後のところのふしはよかったんだけど、最後にあのふしを付けるとまだまだ続くような感じするので、一番最後にあのふしを付けるといい。」 C6 「貝原さん」 C17 「3班さんはよくできていたんだけど、〇〇君がちょっと間違えたのが残念。」
(24.50) C6 「他にありませんか。6班さん発表してください。」

第6班 (24.56) C18 「私たちの班は、3拍子に変えて、最後に三部合奏を創って、つなぎの音を入れました。」



第7班 (25.36) C19 「僕たちの班は、3拍子に変えて、つなぎの音を入れてみました。」



第8班 (26.14) C20「私たちの班は、3拍子に変えて、和音を入れました。」

第9班 (26.50) C21「○○……。」(聴き取れない)

第10班 (27.23) C22「私たちの班は、つなぎの音と合うふしを入れました。」やり直し1回。

第11班 (28.09) C23「私たちの班は、リズムを少し変えてみて、終わりの音を二部合奏にしました。」

(28.50) C6「今までの班で、何か意見はありませんか。小畑さん。」 C24「岡本さんたちの班では、ミの音をファ(実際に鍵盤ハーモニカで吹いて)にしたらいいと思いました。」 C6「○○さん。」 C25「山田さんの班では、ミはいいんだけどラをソ#(実際に鍵盤ハーモニカで吹いて)に変えたらいいと思いました。」 C6「中島君」 C26「9班の権藤さんがみんなの方を見ないで吹いていたので、みんなの方を見て吹いたらいいと思いました。」 C6「松井さん。」 C27「6班さんは、さみしい感じだったので、和音が合う音を入れれば、もっとよくなると思いました。」 C6「藤井さん」 C28「11班さんは、○○……。」 C6「貝原さん。」 C14「2班さんは、○○……。」 C6「柳田さん。」 C29「○○……。」 C6「他にありませんか。次は《冬げしき》の勉強をします。○○……。」

VII - II-III 《冬げしき》

(30.15) C30「口を開けて元気に歌ってください。」 C 全員「はい」

斉唱 指揮者 C30, ピアノ伴奏 C31。1・2番。

C1「座ってください。」

(31.30) T「はい、それでは今日はこの《冬げしき》を二部合唱で歌う練習ですね。残り時間13分ほどの間に○○……。できればこの時間の最後に二部合唱で○○……。」

(32.20) 高声部と低声部に分かれて、ピアノと電子オルガンの音とりにあわせて練習する。

約7分間にわたってパート練習を行う。

(39.15) C1「前に出てきてください。」C 全員移動。

(40.00) C30 (指揮者)「テンポに気を付けて歌ってください。大きくなるところや小さくなるところに気を付けて歌ってください。」

《冬げしき》二部合唱 1・2番。ピアノ伴奏

(41.15) T「はい。初めて歌ったんですけどとてもよかったんですけど、何か気が付いたところ、ここをこういうふうにしたらもっといいなとか、ここをこういうふうい直したらいいなとか。これが最高に良かった?……。○○君」

C31「下より上が強かった。」

T「下の人、つられずにしっかり歌えましたか。」

C32「上の方が強かった。」……。……。

T「今のこと、今の意見に気を付けてもう一回歌ってみましょう。」

(42.10) 《冬げしき》二部合唱

(42.40) 録音終了

Ⅷ 本授業の検討

本授業には、「ふしづくりの教育」の特徴がよく示されている。前述したこれまでの「ふしづくりの教育」の授業研究から明らかになった7つの視点に沿って言及する。

① 学習者の主体性が確保されている。

・授業の進行は学習者が行う。・すべての既習曲の演奏は、学習者が指揮・伴奏する。この点に関しては、完全に達成されていた。授業の進行は学習者が担当していたし、既習曲や《冬げしき》の指揮・伴奏はすべて学習者が担当していた

② 学習者の授業規律は完璧に確保されている。

授業規律に関しても完璧であった。

③ グループ活動の重視。

4人組によるふしづくりとその発表に代表されるように、よく工夫されていた。しかし、4人でふしづくりは、人数が多すぎたと考える。

④ ソロ・発言の機会が確保されている。

指揮、伴奏を多くの学習者が担当していた。さらに、ふしづくりに対する意見発表等でも多くの学習者が発言していた。

⑤ 反復の多用。この視点は、低学年のふしづくりでの特徴であり、本授業では見られなかった。

⑥ 教師の発言等の時間の少なさ。

・文献1)での教師の発言等の時間は、3分45秒。

・文献4)での教師の発言等の時間は、1分10秒。

この視点が最も特徴的である。本授業の授業者である明楽節夫教諭は、発言したの3つの場面だけである。その時間は、1分25秒で、録音時間の3%強にすぎない。第1の場面は、短調のふしづくりが終わり、その発表に移る直前に、各班の発表を聴く際の注意点を述べたものである。第2の場面は、《冬げしき》のパート練習が終わり、最初の二部合唱に移る直前の発言である。第3の場面は、その最初の二部合唱について、「とてもよかった」と評価し、「もっとこうしたらよくなる」点を学習者に気づかせ、発言させ、それを最後の二部合唱に生かすためのものであった。

このように、学習者の主体性を信じて、本教師は常に控えめな存在に徹していた。しかし、授業の全

体は教師の意図した方向に進み、しかも成果を着実に上げている、という見事な実例であったといえる。つまり、教師が学習者集団の組織化に成功した結果であるといえる。授業者の明楽節夫教諭は、大学では音楽を専門教科として選択した、中免音楽の保有者である。こうした事例では、教師が前面に出すぎて、結果的に学習者の主体性を損なう例が見られた（文献6）。しかし本教師は学習者の主体性を尊重し、自制に努めた。こうしたことを総合的に考えると、本授業は、「ふしづくりの教育」として、高く評価できるものである。

⑦ 学習者の歌唱力や演奏力は優秀である。

本授業においても、安定した歌唱力と演奏力を示すことができた。

Ⅷ おわりに

倉敷市立茶屋町小学校における「ふしづくりの教育」は、昭和49年に開始されたと考えるのが妥当である。本授業が実施された昭和52年11月は、それからわずかに3年半を経たにすぎない。本授業の第5学年も第2学年から「ふしづくりの教育」を経験した。したがって、茶屋町小学校のふしづくりの授業には、古川小学校での授業に匹敵するもの（文献4）と本授業）と、授業前半の第1部の既習曲と第2部のふしづくりでは、かろうじて授業規律を保っていたが、第3部の新しい教科書教材の学習では教師主導に陥って、結果的に授業規律が保てず、授業が空中分解してしまった感のあるもの（文献5）とが混在していた。

この点から考えると、茶屋町小学校の本授業は、まことに真摯で、将来性のある授業であるといえる。最後に授業者の明楽節夫教諭の言葉を引用する。

「自分は茶屋町小学校の後にいくつかの小学校に勤務し、そのなかには附属小学校もあったが、ここでの授業ほど学習者の意欲が高い授業はなかったし、この授業の水準の歌声を引き出せたことはなかった。

「ふしづくり一本道」の学習のすばらしさは、さまざまな学習者に対して、音楽の好きな子どもも得意でない子どもも「自分もしてみたい」「僕でもできる」と積極的に学習に参加していたことだと考えます。音楽を専門教科として実践をしてきた私も、その後の学校でここまで多くの子どもを音楽の学習に引き込むことはできなかつたように思います。「誰でもできる」とは、教師だけでなく苦手な子どもにとっても言えるシステムであったと強く思います。誰でもできる音楽の授業「ふしづくり一本道」を作り上げられた古川小学校の先生方のすばらしさを改めて感じています。」

文献

本発表に先立つ「ふしづくりの教育」の授業研究は以下である。

- 1) 三村真弓, 吉富功修, 松永洋介, 中村隆夫, 山崎俊宏 (2012) 「ラウンドテーブル 岐阜県におけるふしづくりの音楽教育成立の軌跡 昭和49年10月28日 第1学年竹原一江教諭の実践」『音楽教育学』第42-2, pp.72-76。
- 2) 吉富功修, 三村真弓, 伊藤真, 日本音楽教育学会第45回大会 聖心女子大学 2014年10月26日, 「「ふしづくりの教育」における授業の実際—第3年の授業を中心として—」
- 3) 吉富功修, 三村真弓, 伊藤真, 音楽学習学会第10回大会 埼玉大学 2014年7月26日, 「「ふしづくりの教育」における授業の実際—第4学年(滝上定江教諭)の授業を中心として—」
- 4) 吉富功修, 三村真弓, 長澤希 (2015) 「岡山県倉敷市立茶屋町小学校における「ふしづくりの教育」—第6学年の実際(昭和52年)—」『教育学研究紀要』(CD-ROM版) 第61巻, pp.608-613。
- 5) 吉富功修, 三村真弓, 八木正一, 長澤希, 日本音楽教育学会 第46回宮崎大会 2015年10月3日 「岡山県倉敷市立茶屋町小学校における「ふしづくりの教育」—第1学年の実際(昭和52年)—」
- 6) 吉富功修, 三村真弓, 伊藤真, 音楽学習学会 第12回研究発表会 九州女子大学 2016年8月25日 「「ふしづくりの教育」の授業研究—高山市立西小学校第5学年・長尾教諭の授業を対象として—」